

外国人等の散在地域における日本語指導体制の充実 (3年次)

ー 校内や関係機関における連携のための取組と授業実践を通して ー

長期研修員 日本語指導スーパーバイザー (JSV)
近藤 智香子 鈴木 威仁 箱田 樹 角田 順子 篠原 知洋

《研究の概要》

本研究は、散在地域における日本語指導体制の充実を目指したものである。1、2年次の研究の成果を踏まえ、3年次では「点から面へ」を意識して、外国人児童生徒等教育をきっかけに、職員同士、児童生徒同士のつながりを強くし、誰もが自分らしく輝ける未来を共に作り出すための指導の充実を目指した。

これは、一から始めるものでなく、みんなが分かる特別支援教育の指導法、未来へつながるキャリア教育の視点を生かし、互いに認め合う多文化共生教育が多くの人々に広がるように願うものである。

キーワード 【外国人児童生徒等教育 特別支援教育 キャリア教育 多文化共生教育】

群馬県総合教育センター

分類記号：G17-01 令和7年度 288集

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。

<各社の商標又は登録商標>

Google Forms、Google スプレッドシート、Google 翻訳、NotebookLM は、Google LLC の商標又は登録商標です。

なお、本文中には ™ マーク、® マークは明記していません。

I 主題設定の理由

現在、日本は国際化の進展、産業構造の変化、少子高齢化による労働力不足など様々な要因に抛り、在留外国人数は過去最多を更新し続けている。群馬県内においても、増加の一途をたどっている。それに伴い、学校でも外国人児童生徒等の受入れが増えている。本県では、日本人と外国人が対等な関係を構築していくために、誰一人取り残されることなく、地域社会の構成員として共に生きる多文化共生・共創社会づくりを進めている。そのための重要な柱である「教育の充実」に向けて、外国人児童生徒等が将来、地域の一員として活躍できるよう、高校教育までを見据え、義務教育段階の教育において「外国人児童生徒等教育充実総合対策」を実施している。

令和4年度までの巡回型日本語指導員（JLT）は、散在地域（外国人が分散して住む地域）の学校を訪問し、日本語指導や担当教員に指導のアドバイス等をする役割であった。巡回をする中で、散在地域では、集住地域（外国人が多く住む地域）に比べて十分な学校の支援体制が整備されておらず、外国人児童生徒等やその保護者への対応や指導において大変苦慮している実態があった。

そこで、令和5年度から新たな取組として日本語指導スーパーバイザー（以下、JSV）を散在地域に配置した。JSVの配置の目的は、日本語指導を要する児童生徒への直接指導や担任等への助言、多文化共生教育の実践研究により、外国人児童生徒等に係る実践的な指導力や助言力を備えた指導的な役割を担える人材を育成するとともに、外国人等の散在地域における日本語指導体制を充実させることである。JSVが以下の役割を果たすことにより、散在地域においても、受入れから指導・支援まで、指導体制を構築し充実できると考え、本主題を設定した。

- 置籍校及び巡回校において、校内の指導体制が整えられるよう、教職員に対し、日本語指導等について助言する。
- 日本語指導を要する児童生徒の学級担任に対し、個別の指導計画及び在籍学級における日本語指導等に係る助言を行う。
- 置籍校及び巡回校において、日本語指導を要する児童生徒に対し、入り込み、または取り出しによる直接指導を行う。
- 散在地域の課題に対して、外国人児童生徒等教育のコーディネーター的立場から、教育委員会や学校の求めに応じて情報提供等の必要なサポートを行う。
- 総合教育センターの長期研修員として、多文化共生教育に係る実践研究を行い、成果を全県下に普及する。

II 研究のねらい及び内容

1 研究のねらい

外国人等の散在地域での日本語指導の充実を図るため、校内や関係機関における連携のための取組と授業実践を通して指導力を高めるとともに、本県の外国人児童生徒等教育の中核として得た情報や学んだ知識を伝達したり、助言に生かしたりすることで日本語指導体制の充実を図る。

2 基本的な考え方

(1) 「外国人等の散在地域における日本語指導体制の充実」とは

外国人等の集住地域では、各学校に日本語指導を行う担当者がおりサポートを受けやすい状況にある。一方、散在地域では、地域内に移住する外国人等の数が少ない上に分散している。そのため、外国人児童生徒等がいない学校や、数名程度在籍している学校もあり、校内に日本語指導に携わったことがない教職員が多く、日本語指導をどのように進めていったらよいのか、どのように指導していったらよいかなど、日本語指導体制の整備に課題がある。

本県では、「外国人児童生徒等教育充実総合対策」として三つの柱を立て、整備体制を整えることを目指している。

① 群馬モデルの標準化

全ての教職員が一定水準の専門性を備えること。

② 外国人児童生徒等受入れ促進

外国人児童生徒等教育において、受入れから指導・支援まで地域差のない一貫した指導体制を構築充実させること。

③ 包括的支援

様々な悩みを抱える外国人児童生徒等やその保護者に対して、心理面を含めた包括的な支援を実施すること。

そのため、外国人児童生徒等の散在地域においては、令和5年度からJ S Vによる日本語指導及び学級担任への助言、学校への働き掛けにより、全ての教職員が一定水準の専門性を備え、日本語指導体制の充実につながる取組を行っている。

(2) 「校内や関係機関における連携のための取組」とは

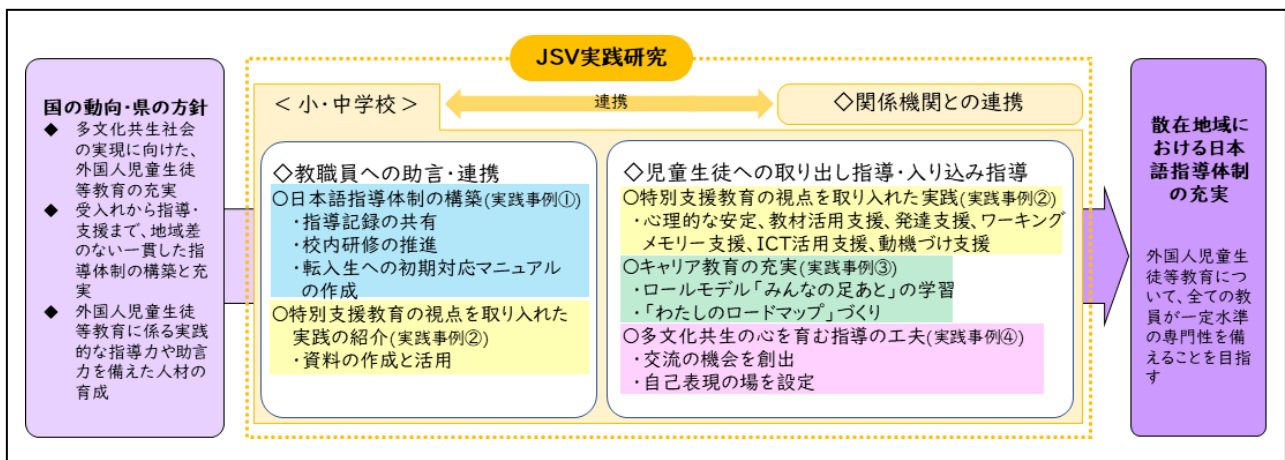
① 校内における連携のための取組

個別の指導計画や指導記録を作成し、学校全体で組織的・計画的にきめ細やかな指導を行うこと。また、在籍学級と連携し学習環境や教具、指導法などの助言を行うとともに、教科指導を行うこと。

② 関係機関における連携のための取組

個別の指導計画を次年度に、卒業時には次の学校に引継ぎ、切れ目ない日本語指導の実践を行うこと。また、教育委員会、高等学校、国際交流協会、地域のボランティア等の関係機関と連携を取り、様々な悩みを抱える児童生徒等や保護者に対して、心理面を含めた包括的な支援を実施すること。

3 研究構想図



Ⅲ 実践事例

実践事例 1

1 実践テーマ

チームで取り組む日本語指導体制の構築に向けて

2 実践の概要

現在、前橋市には、100人を超える外国人児童生徒等が在籍している。居住地域も散在しており、数名在籍するだけの学校が多い。また、来日して間もない児童生徒が突然転入してくることもある。伊勢崎市や太田市などの集住地域では、日本語教室やバイリンガル教員を配置するなど、外国人児童生徒等に対する支援体制が組織化されているが、散在地域では体制づくりの構築が遅れているのが現状である。前橋市は、令和6年度よりJSP（日本語スタートアッププログラム）をスタートさせたり、支援要請を受けて日本語指導員を配置したりと、外国人児童生徒等を受け入れる組織体制を整えつつある。しかし、対象児童生徒が突然転入してきたときの、保護者への対応、言葉の壁の問題、既習内容の違いなどの問題があるが、担任をはじめ一部の教職員のみで対応せざるを得ないのが現状である。

そこで、一部の担当者による「点」の支援ではなく、複数の教員や外部の関係機関など多くの人が関わる「面」の支援体制を構築する必要があると考えた。これは、外国人児童生徒等教育充実総合対策として掲げている群馬モデル標準化「外国人児童生徒等教育について、全ての教職員が一定水準以上の専門性を備えることを目指す」にもつながる。専門家がいなくても、教職員全体で児童生徒を支える土台となる体制を組むことを本研修のテーマとした。その手立てとして3点考えた。

(1) 手立て1 校内研修の実施

A校は、4名の外国人児童が在籍している。4名とも来日後2年以上が経過しており、ほとんどの児童が生活言語の習得ができていて友達や教職員とも日本語で困らずに会話し、最低限のコミュニケーションを図ることができている。しかし、学習言語の習得が難しいため学習においては支援が必要である。また、A校は外国人児童の転入、入学予定者がおり、今後更に日本語指導の需要が高まることが予想される学校である。

そのため、学級でできる日本語指導の手立てについて知識や理解を深めてもらいたいと考えた。その上で、全ての教職員が自分事として捉え、今後、外国人児童生徒等を担任することになったときを想定し、意識を高めていくことが必要であると考え研修を計画した。

1回目 4月

「日本語指導およびのJSP役割について」

- ① 県及び市内の外国人児童生徒の状況
- ② JSPの役割について
- ③ 日本語指導について
- ④ 「ぐんぐんガイド」・「かすたねっと」などの資料となるものについて

2回目 12月

「日本語指導の実践」

- ① 取り出し指導について
- ② 入り込み指導について
- ③ 教室でできること
- ④ 参考にできるもの

(2) 手立て2 指導記録の共有

外国人児童生徒等の指導・支援には、JSP、日本語指導員など多くの教職員が関わる必要がある。しかし、勤務日や勤務時間などの関係により、日本語指導に携わる教職員が一堂に介して情報を共有したり、支援策を検討したりするなど連携を図ることは難しいという課題を多くの学校が抱えている。その上、日本語指導員は、1日に何校も受け持っている人が多く、担任をはじめとする関係職員と関わる時間もないまま次の学校へ移動しているため、情報共有が上手く行われず、JSPばかりでなく担任でさえ在籍学級の対象児童生徒がどんな指導を受けているのか把握できてい

ないということも多く起きていた。児童生徒の困難さに早期に対応ができるよう、また、必要な支援を迅速かつ確実にに行えるように、関わる職員同士の連携は不可欠だと考えた。そこで、指導記録を作成し、関係する教職員で情報を共有できるようにした（図1・図2）。

また、個別の指導記録（図3）に文部科学省が提唱した「ことばの力のものさし」（図4）を取り入れた個別の指導記録を作成し、指導記録とともに児童生徒の学力状況や目標を確認できるようにした。

実践したのは、訪問している小学校5校である。日本語指導員とJ S Vが指導内容、学習中の様子を記入した。学校からも、担任や教科担任など支援に関わった職員が1週間の出来事や学習の様子など簡単に記入してもらうようにした。チェック欄を設け、担任や教科担任、管理職がコメントを記入しなくても誰が指導記録に目を通したのか確認したことが一目で分かるようにした。

指導経過	日付	時間	内容	担当より	学校より	チェック		
						在籍学級担任	教科担任	管理職
1	9/1	1時間目	J S Vまたは日本語指導員が指導した内容を記入	<ul style="list-style-type: none"> J S Vまたは、日本語指導員が指導して気付いたこと できるようになったこと つまづいたところ 在籍学級での支援となり得る出来事 <p><u>J S V・日本語指導員が記入</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> 在籍学級での授業の様子 日本語指導を受けた後の変容 生徒指導 欠席状況 保護者からの連絡 <p><u>担任・教科担任・生徒指導担当が記入</u></p>			

図1 指導記録記入例

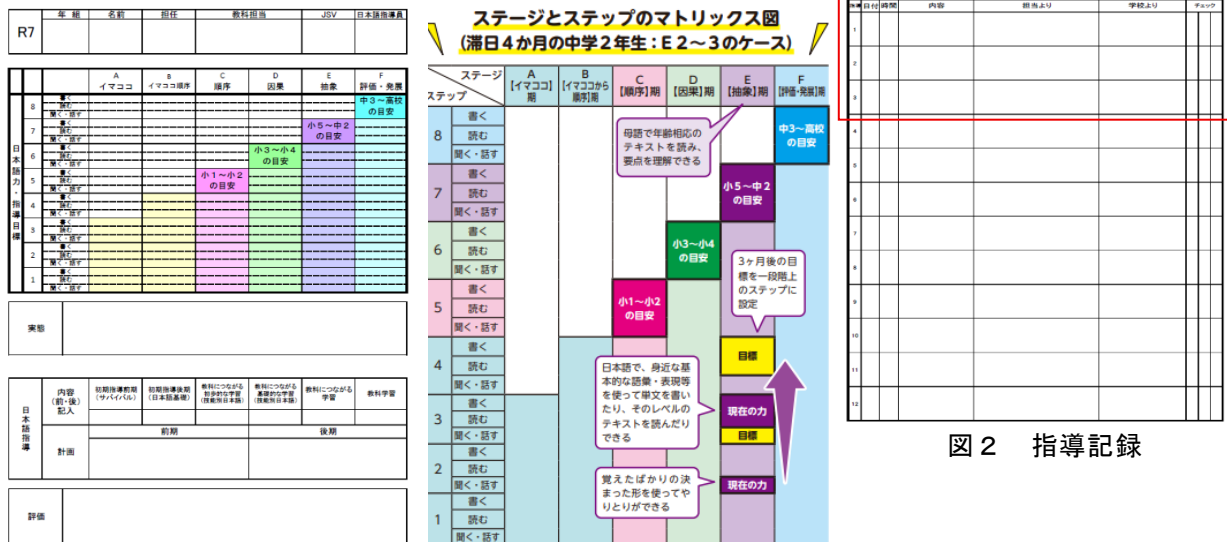


図2 指導記録

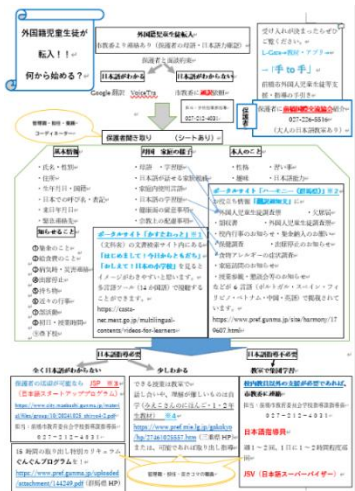
図3 個別の指導記録（資料(1)） 図4 ことばのものさし記入例

(3) 手立て3 転入生がいたときのマニュアル

今年度、新たに6人の転入生の対応にあたった。外国人児童生徒等の受入れが初めてだという学校もあり、どのように対応していったらよいかという相談を受けた。教育委員会をはじめ、市内には外国人児童生徒等をサポートしてくれる機関があったり、便利なポータルサイトなどがあつたりするが、多くの教職員はそうしたものの存在を知らないということが分かった。それに加え、外国人児童生徒等の転入時に、家庭で主に使われる言語、宗教、既習事項、生活環境など学校生活を送っていく中で事前に知っておくと、その後の指導に役立ったり、誤解やトラブルを未然に防いだりすることにつながる。これらの情報や対象児童生徒及び保護者の思いを学校と保護者の双方で共有することが、心理的安全性を高めることにつながるのではないかと考えた。そこで、転入生が来たときに少しでもスムーズな手続きや支援につなげられるよう、フローチャートを作り、巡回している学校に活用してもらうようお願いした。

フローチャートに記載した内容は、次のとおりである。

- 通訳の必要の有無
- 保護者からの聞き取り（ポータルサイト「かすたねっと」、「ハーモニー」活用）
- 日本語指導必要の有無
- 参考にできる指導案（ぐんぐんプログラム）、教材



Listening sheet		sex	man	woman
full name				
Name when written		How to call		
address		Emergency Contact	①	②
nationality		Language at home		
religion		Things to note		
Lessons		Favorite things		
personality				

図6 聞き取りシート

図5 外国人児童生徒が転入したときのフローチャート
(資料(2))

3 成果と課題

(1) 手立て1 校内研修の実施について

J S Vとして関わるA小学校で、2度の校内全体研修を行うことができた。また、2回目の研修後の行ったアンケートの結果は以下のとおりである。

J S Vが訪問しての指導報告や研修を通して、日本語指導に対する理解が深まったり、知識が得られたりしたと思うか。	思う100%		思わない0%	
日本語指導に関する興味はあるか。	ある55%	少しは36%	あまり9%	ない0%
指導記録について必要だと思うか。	思う64%	手間だが必要36%	不要0%	共有は不必要0%
来日して間もない外国籍児童生徒を担当することになったら対応できると思うか。	思う0%	少し思う73%		思わない27%
担任する上で知りたいことはあるか。	<ul style="list-style-type: none"> ・1から日本語を教えるとなると、どこから教えられるのか。一緒に授業を受けるとしたら、そのまま授業をしてもいいものか。 ・これまでに一番手応えがあった手立てがあれば教えてほしい。 ・児童とのコミュニケーションの取り方。 ・外国人児童生徒等の母語に合わせた資料や教材等があるのか知りたい。 ・様々な手段があることや授業の進め方を学ぶことができた。実際に外国人児童生徒等を担任してみないと分からないことがたくさんあるのかなと思った。 			

- アンケートの結果から多くの教職員が、日本語指導に興味があり、必要性を感じていることや研修を通じて日本語指導に対する理解が深まっていることが分かった。

- 研修を行ったことで、先生方から取り出しや入り込みでの授業相談、教室でできる手立ての相談、保護者対応の相談などが増えた。
- 対象児童の学級担任や日本語指導担当となった場合の指導や対応について不安を抱いている職員が多かった。転入生が来る可能性があるという危機感は先生方ももっていることが分かる。今後、その不安を払拭できるよう、研修の場や体制づくりが更に必要である。
- JSVとして、巡回している全ての学校で、研修を実施できたわけではない。在籍している外国人児童生徒数やそれぞれの児童生徒が抱える困難さによって、日本語指導の重要度の差は大きい。学校は、生徒指導を含む多くの課題を常に抱えている。優先順位をつけながらも、校内研修の年間計画の中に日本語指導について研修する機会を設定し、教職員の意識向上を図っていく必要がある。

(2) 手立て2 指導記録の共有について

- 指導記録の活用により、これまで一部の指導者による「点」での支援だったものが、「面」での支援体制を作るきっかけになった。学級担任だけでなく教科担任にも指導記録を見てもらうようお願いしたことで、外国人児童生徒等と積極的に関わろうとする先生方が増えた。
- 指導記録を作成することで指導や支援を「見える化」することができた。今後、記録を蓄積していくことで、ケース会議や支援会議の補助資料となったり、次年度以降の引継ぎ、支援方針に生かしたりすることが期待される。また、それを複数の教職員で共有できるため、早期の児童生徒理解や支援にもつなげることができる。
- 指導記録の確認のチェック欄を設け、コメントを書かなくてもよいことにしたことは、関係する多くの先生方に目を通しやすくなることのできた上に負担軽減になったと思う。さらに、情報共有できていることを確認するためにも有効であった。
- 1日のうちに複数の学校へ移動する日本語指導員が多いことから、指導記録を記入する時間がない場合がある。情報機器が支給されていないため紙による記入を今年度は行ったが、負担軽減を考えると、記載方法や情報共有の仕方、情報の管理・保存の仕方など、それぞれの学校の実態に合わせながら検討していく必要がある。

(3) 手立て3 転入生が来たときのマニュアルについて

- 転入生が来た際の聞き取りは、「ハーモニー」と「聞き取りシート」を活用して行うことができた。管理職からは、手掛かりになるものがあって学校としてよかったという感想があった。
- 作成後巡回している学校へも紹介した。それぞれの学校で転入生が来た際に活用できるよう、周知していくとともに、更に聞き取りシートの改良をしていく必要がある。
- 情報が散在しており、必要な情報を得て指導や支援に生かすことができていない学校もある。いつどの学校で必要となるか分からないため、必要になってからではなく、いつでも使えるように準備していくことが大切だと考える。国や県、市の指針や動向などの情報を全職員へ伝達したり、学校体制づくりをしたりすることが必要だと感じた。そのためにも、誰でも近い将来に日本語指導をし得るのだと自分事として捉えるとともに、学校全体で考えていけるように働き掛ける中心的立場を、どの学校も常設する必要がある。

4 資料

(1) 個別の指導記録

R7	年 組	名 前	担 任	教科担当	JSV	日本語指導員

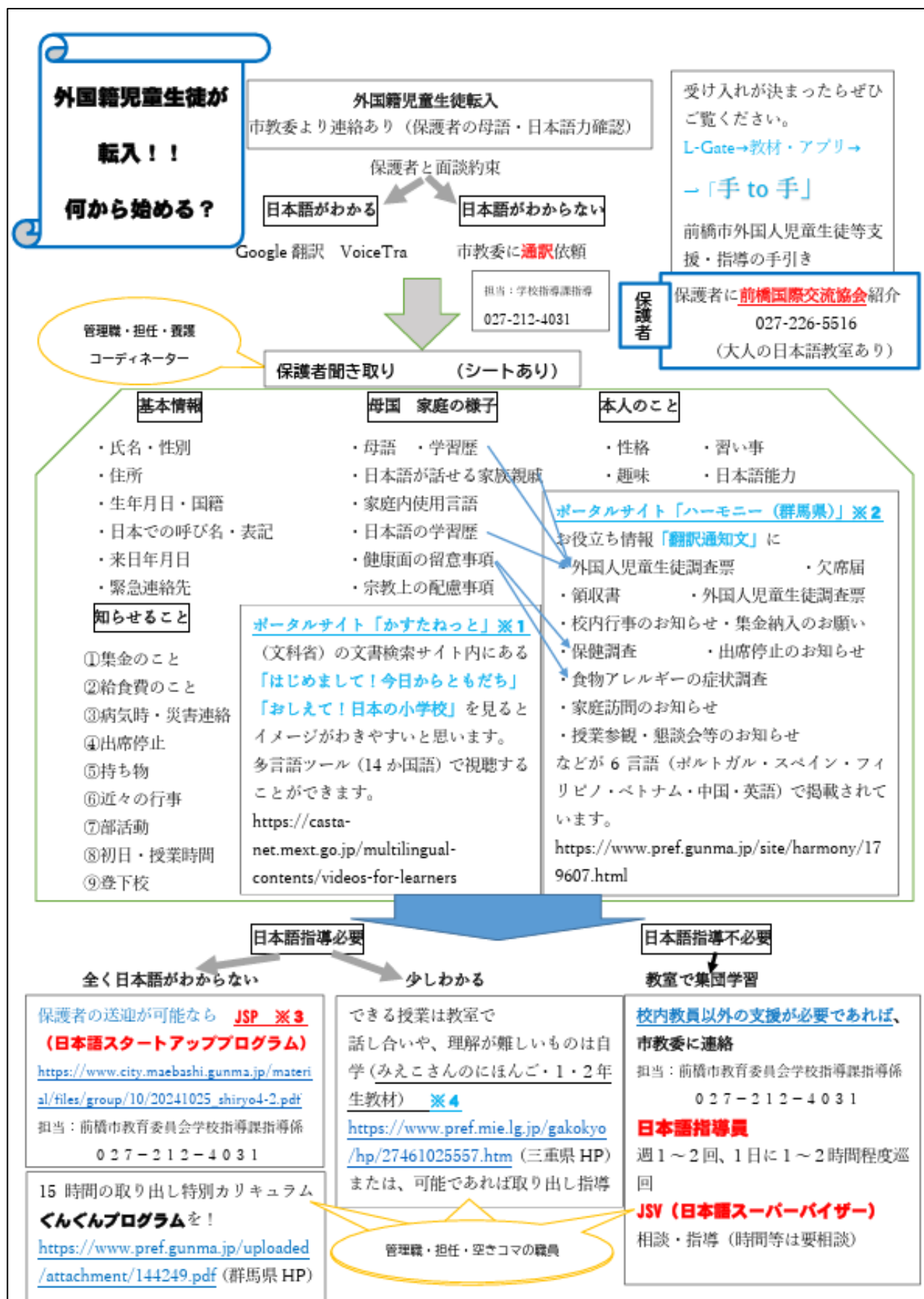
		A イマココ	B イマココ順序	C 順序	D 因果	E 抽象	F 評価・発展
日本語力・指導目標	8	書く					中3～高校の目安
		読む					
		聞く・話す					
	7	書く					小5～中2の目安
		読む					
		聞く・話す					
	6	書く				小3～小4の目安	
		読む					
		聞く・話す					
	5	書く			小1～小2の目安		
		読む					
		聞く・話す					
4	書く						
	読む						
	聞く・話す						
3	書く						
	読む						
	聞く・話す						
2	書く						
	読む						
	聞く・話す						
1	書く						
	読む						
	聞く・話す						

実態	
----	--

日本語指導	内容 (前・後) 記入	初期指導前期 (サバイバル)	初期指導後期 (日本語基礎)	教科につながる 初歩的な学習 (技能別日本語)	教科につながる 基礎的な学習 (技能別日本語)	教科につながる 学習	教科学習
		計画	前期			後期	

評価	
----	--

(2) 外国人児童生徒が転入したときのフローチャート



実践事例 2

1 実践テーマ

特別支援教育の視点を取り入れた外国人児童生徒等の支援の工夫

2 実践の概要

どの学校においても多様な個性や特性を有する子供が在籍している学級が顕在化している。「中央教育審議会 教育課程企画特別部会 論点整理」(令和7年9月25日)によれば、小学校35人学級において日本語を家であまり話さない子供が1.0人(2.9%)、学習面又は行動面で著しい困難を示す子供が3.6人(10.4%)、特異な才能がある子供が0.8人(2.3%)の割合で在籍している(図1)。

このような状況において、教員が外国人児童生徒等の指導を行う場合、特別支援教育

の視点をもった支援を行うことが求められる。なぜなら、特別支援教育は全ての児童生徒が対象であり、その理念においては外国人児童生徒等の教育に共通する部分があるからである。しかし、学校現場では特別支援教育の大切さは意識されつつあるものの、それらが外国人児童生徒等への支援にも有効であることが具体的に伝わっていない様子が見受けられる。

そこで、本研究では、特別支援教育の視点を通した外国人児童生徒等の日本語指導を行い、その有効な支援を具体的に示し、外国人児童生徒等の指導について全ての教員が「これなら現場でやってみたい」「今までやってきたことの延長上として取り組んでみたい」という学級での受け入れ体制を共有することで、一定水準の専門性を備える「群馬モデル標準化」に資することができると考えた。

なお、「外国人児童生徒等への学習支援ガイドブック ぐんまのかけはし」(群馬県総合教育センター)では、在籍学級での指導編として、特別支援教育の視点(視覚化・焦点化・共有化)等が示されている。本実践においては、これらを踏まえ、外国人児童生徒等一人一人について、特別支援教育の視点を取り入れた具体的な支援等を行い、日本語指導との関連を示した。

【実践例① 心理的支援】

・ 児童A 小学校第1学年女子 ネパール籍

実態: 日本語の読み書きに初めて触れる。生活に必要な言葉を学ぶ段階。

特別支援教育の視点及び手立て: 書き直しを少なくし、安心して取り組めるように、手本を透明のファイルに挟み、その上からホワイトボードマーカーでなぞった。

効果: 消しゴムで書き直すことがないため、平仮名を書く活動に安心して取り組み、成功体験を味わうことができた(図2)。

・ 児童B 小学校第4学年男子 フィリピン籍

実態: 日常会話がある程度できるが、下学年の学習内容が未定着な部分が多い。

特別支援教育の視点及び手立て: 下学年の学習内容が未定着な部分があっても、計算の学習に安心して取り組めるように、かけ算九九表を手元に置き、確認することができるようにした。



図2 書く活動

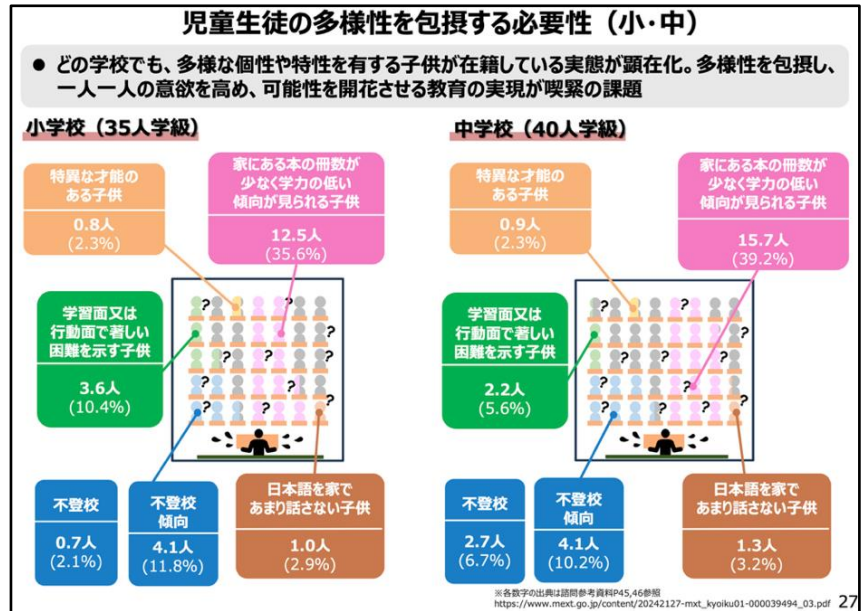


図1 中央教育審議会 教育課程企画特別部会 論点整理

効果：3（さん）×6（ろく）＝18、4（よん）×7（なな）＝28など、九九の言い方にはこだわらずに取り組み、落ち着いて計算問題に取り組むことができた。

・ **児童C 小学校第3学年女子 フィリピン籍**

実態：指示理解はできるが、自分の思いや考えを伝えることが苦手。

特別支援教育の視点及び手立て：お手本をなぞることから、自分の考えを書く部分を増やす等、少しずつ変化を加え、書く活動に安心して取り組めるようにした。

効果：ステップを三つ程度踏み、自分の考えを書くことができるようになった（図3）。

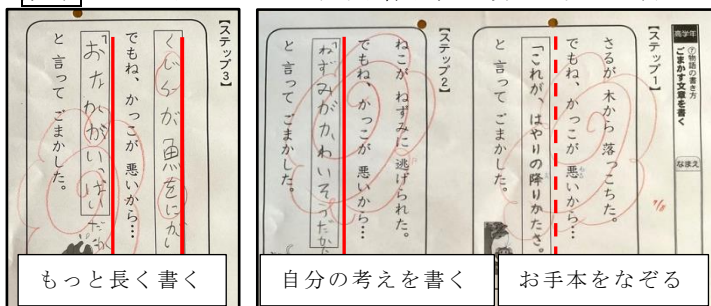


図3 スモールステップを取り入れたワークシート

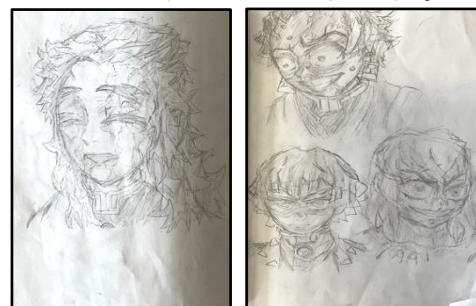


図4 本人の得意なことが活かされた絵

・ **児童D 小学校第5学年女子 ベトナム籍**

実態：簡単な日本語の復唱や返事はできるが、自分から日本語で友達に話し掛ける姿勢は見られない。

特別支援教育の視点及び手立て：本人の得意なことや興味関心を生かせるように、本人が描いた絵を休み時間等に友達に見せるようにした（図4）。

効果：イラストをきっかけに周りの友達から話し掛けられることが多くなった。日本語での会話はまだ見られないが、友達の声掛けに対して意思表示をする場面が多くなった。

【実践例② 教材活用支援】

・ **児童E 中学校第1学年女子 中国籍**

実態：来日1年未満であり、国語や社会の学習語彙の理解が難しい。

特別支援教育の視点及び手立て：本人の実態にあった教材を準備するために、やさしい日本語で教科書の内容を書き直した「リライト教材」を作成した。さらに、母語での訳をつけた。

効果：やさしい日本語で聞いたり、母語で確認したりして国語や社会科の学習を進めることができた。

・ **児童F 小学校第3学年男子 パキスタン籍**

実態：日常会話はできるが、漢字やカタカナ等、学習内容が未定着な部分が多い。

特別支援教育の視点及び手立て：視覚的な情報を手掛かりにして、漢字を読むことができるように、イラストをヒントにした漢字を読む学習に取り組んだ。

効果：イラスト無しで文字だけで漢字を読むことができるようになった（図5）。

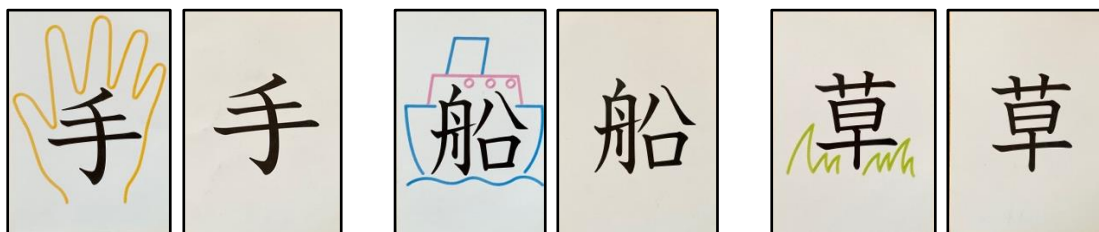


図5 イラストをヒントにした漢字の読み学習

【実践例③ 発達支援】

・ **児童G 小学校第5学年男子 パキスタン籍**

実態：日常生活の中で自分の思いや考えを伝えることができる。

特別支援教育の視点及び手立て：本人の強みを生かすために、「ストーリーキューブ」という教材を使って小話作りに取り組んだ。



図6 ストーリーキューブ

- ・ 児童N 小学校第6学年男子
国籍未定

実態：母語の力を生かして学習内容を理解することができる。

特別支援教育の視点及び手立て：本人の長所（ストレンクス・ポイント）を生かすために、生成AIを活用した。

効果：生成AIを使って作成したスライドで視覚的に日本の歴史について学ぶことができた（図10）。

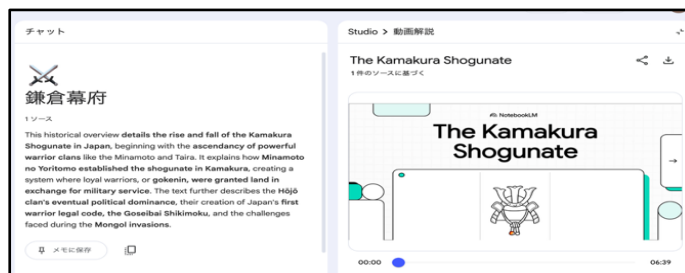


図10 生成AIと母語の力を生かした歴史学習

【実践例⑥ 動機付け支援】

- ・ 児童O 小学校第5学年男子 パキスタン籍
- ・ 児童P 小学校第5学年女子 フィリピン籍

実態：おおむね通常学級の授業に参加できるが、自ら学びに向かう姿勢が課題。

特別支援教育の視点及び手立て：自ら学びに向かうことができるように、環境づくりを行った。「話す」「聞く」「書く」「読む」の課題の中から、「自分がもう少し頑張ればできそうな課題」について選択し、取り組めるようにした。また、学習の形態については、「一人で学ぶ」「友達と学ぶ」「先生と学ぶ」「タブレットを使って学ぶ」「学習ファイルを使って学ぶ」等、毎時間児童が選択できるようにした。学習の最後の振り返りでは、本人と対話をし、「これからどのような課題に取り組んでいったら力がより伸びるか」「自分の得意なところを伸ばすことができるか」等について話し合った（図11）。

効果：最初は課題を選ぶことに戸惑う姿が見られたが、「今日はこれ（教材）を使って話す学習をしたい」「今日も書くワークの続きをやりたい」と、主体的に学ぶ姿勢が見られるようになった。また、タイムタイマーをセットして、「15分間、自分の選んだ課題に取り組みたい」と自分で学習時間を調整することもできるようになった。振り返りでは、本時でできたことやさらに取り組みそうな学習について話し合った。

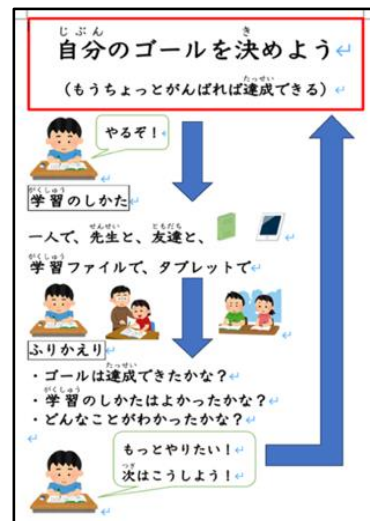


図11 自己調整学習の流れ

3 考察

外国人児童生徒等の日本語指導において、特別支援教育の視点を通じた支援（「心理的支援」「教材活用支援」「発達支援」「ワーキングメモリー支援」「ICT活用支援」「動機付け支援」）を行った。これらの支援の中で「心理的支援」は、児童生徒と関係を作ったり、安心して日本語学習に取り組んだりする環境を作る上で重要であった。外国人児童生徒等の指導においては、該当児童生徒の心理的な安心感を十分満たすことを第一とする。

「教材活用支援」「発達支援」「ワーキングメモリー支援」については、特別支援教育の知見も求められる。そのため、教材の活用や指導方法等については特別支援学級の担任や通級指導教室の担当と連携して取り組むことが考えられる。「ICT活用支援」については、「柔軟な教育課程編成の促進について（令和7年4月10日教育課程企画特別部会）論点整理③」によれば、母語の力を引き出す上で生成AI等のデジタル技術の活用が方向性として示されているため、研修等を通して生成AIの機能等について学んでいく必要がある。「動機付け支援」については、児童生徒が自ら課題を選択し、主体的に学びに向かうことができる環境を整える必要がある。

今後は、特別支援教育の充実に伴い、日本語指導に生かせる支援も増えていくものと考えている。また、外国人児童生徒等を含め、多様な個性や特性を有する児童生徒の多様性を包摂する支援も求められる。

4 成果と課題

- 実践を通して、特別支援教育の視点を取り入れた外国人児童生徒等の日本語指導における支援について具体的に示すことができた。
- 実践例で得られた成果を基に、これまでの経験を踏まえ、外国人児童生徒等の指導につい

て全ての教員が一定水準の専門性を備えるために、具体的な支援や指導等を発信することができた。

- 特別支援教育の視点を取り入れた支援を行ったことにより、外国人児童生徒等が安心して学習に取り組み、自ら学んでいく姿勢が見られるようになった。
- 特別支援教育と外国人児童生徒等の日本語指導における支援の工夫について、引き続き他の支援の仕方を研究し、発信していく必要がある。

実践事例 3

1 実践テーマ

散在地域における日本語指導を要する児童生徒のキャリア教育の充実
～ロールモデル「みんなの足あと」の学習と「わたしのロードマップ」づくりを通して～

2 実践の概要

外国人児童生徒等の中には、学習や活動への意欲に課題があったり、進路に悩んでいたりする子がいる。日本人児童生徒にも同様の課題が見られる子はあるが、外国人児童生徒等特有の原因として、異なる文化間を移動したことで、児童生徒と保護者の実態や環境、進路についての知識や価値観が、他の児童生徒と大きく異なっているということがある。特に散在地域では、外国人児童生徒等が増えているとはいえ、その児童生徒同士が悩みを共有できるほど多くいるわけではなく、支援体制も不十分である。その結果、外国人児童生徒等は将来への見通しをもちづらくなってしまい、学習や活動への意欲の低下や、進路選択の悩みにつながっている可能性が考えられる。

そこで、児童生徒が将来への見通しをもつために、以下の二つの手立てを考えた。一つ目は、外国にルーツをもち現在日本で働いている方々に、J S Vがアンケートを取り、その回答をロールモデル「みんなの足あと」（4資料(1)）としてまとめ、児童生徒が多様なキャリアについて学習するという手立てである。二つ目は、児童生徒がロールモデルを学んだ後に、その学びを生かして自分の将来のロードマップ「わたしのロードマップ」（4資料(2)）を考えるという手立てである。この二つの手立てを取ることで、児童生徒が将来への見通しをもち、今の自分を客観的に捉え、将来について具体的に考えられることを目指した。

今回の実践では、実践の計画（表1）のとおり、ロールモデルから多様なキャリアについて学び、自分のロードマップを作成するという学習活動を行うため、具体的に将来のことを考えられる小学校5、6年生と中学生の外国人児童生徒等8名を対象にした。

表1 実践の計画

時期	内容
8月	ロールモデル「みんなの足あと」の作成
9月	群馬県の「ぐんまの外国につながる子供たちの学び応援サイト ハーモニー」の「ロールモデルインタビュー動画」を使った学習
10月	ロールモデル「みんなの足あと」を使った学習
11月	「わたしのロードマップ」を使った学習

(1) 「みんなの足あと」

ロールモデル「みんなの足あと」の作成にあたって、外国にルーツをもち、現在日本で働いている方々へ8月中にアンケートを行った。アンケート対象として、ALTや教員の家族、高崎市国際交流協会に協力を依頼した。回答のしやすさや回答者のプライバシーを考慮し、回答者の名前については、「児童生徒に公開してよい」か「特定の児童生徒にだけ公開してよい」、「公開しない」を確認する質問を行った。また、オンラインアンケートフォームや生成AIなどのICTを活用することで、多言語への対応をやすくしたり、内容をまとめた動画を用意したりした（次ページ表2）。今回は、外国にルーツをもつ6名の回答が集まった。

表2 活用したICT

ICT名	活用方法
Google フォーム	回答者がブラウザの翻訳機能を使ったり、文書データとして回答を収集したりすることで、多言語への対応をしやすくした。
Google スプレッドシートのアドオン「Autocrat」	収集した回答を回答者一人につき一枚の用紙に印刷した（4資料(1)）。Microsoft Officeで行うならExcelとWordによる「差し込み印刷」と同様の作業である。
Google 翻訳	回答を多言語に翻訳した。今回は日本語と英語の回答を、日本語と英語、モンゴル語に翻訳した。
AccessReadingの「文章にルビを振る」	日本語の回答に振り仮名を振った。
Notebook LM	文書での読み取りが難しい児童生徒のために、収集した回答から児童生徒に知ってほしい内容をまとめた解説動画を作成した。

その後、完成した「みんなの足あと」を使って、ロールモデルの学習を行った。取り出し指導の児童生徒には、取り出した時間の一部を使って少しずつ学習を進めていった。9月に、児童生徒の実態に合わせ、学習の導入として群馬県の「ぐんまの外国につながる子供たちの学び応援サイト ハーモニー」の「ロールモデルインタビュー動画」を活用した。10月になって「みんなの足あと」に取り組むときは、そのままの文書か振り仮名を振った文書、翻訳した文書のいずれかを選んだり、生成AIでまとめた動画を補助に使ったりした。さらに、今の自分と比べたり、自分の将来についてより具体的に考えたりできるように、児童生徒とよく話をしながら学習を進めた。入り込み指導の児童生徒には、取り出し指導の児童生徒同様に、実態に合わせて文書を渡し、授業の合間に読んだ感想や本人の考えを聞き取った。

学習中の児童生徒は、まず自分と同じように外国にルーツをもちながら、日本で働いているという点に興味をもった様子だった。まとめた動画を使った学習ではよく集中し、時折反応したり質問したりしながら視聴していた。文書を使った学習では、心に残ったことや自分と似ているところ、違うところに色を付けたり、下線を引いたりしながら読むことで学習を進めた。動画でも文書でも、実在の個人の経歴であるという点が児童生徒にとって興味深そうであった（表3）。

表3 ロードマップ「わたしの足あと」の中で児童生徒が興味深そうにしていた回答

項目	児童生徒が興味深そうにしていた内容
小さい頃 学生時代 仕事について	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい頃や学生時代から好きだったことが、今の仕事につながっている。 ・小さい頃や学生時代から苦手だったことが、今も苦手なままである。または、克服して得意になった。 ・大学入試で失敗をしたが、その後につながる学びがあった。 ・学生時代のアルバイトの経験が、仕事に生かされた。 ・いろいろな国で、一貫性のない多様な仕事を経験した。
学習者への メッセージ	<ul style="list-style-type: none"> ・失敗しても後から考えると、かえってよかったということがある。 ・完璧な日本人や外国人になることにこだわらず、自分の考えや好きなことを大切にしてほしい。 ・自分の考えやしたいことについて、自問自答をして具体的にしていけるとよい。 ・家族や友達など、周りの人の支援に感謝してほしい。 ・複数言語を話せることは、それだけで大きな強みになる。

(2) 「わたしのロードマップ」

「みんなの足あと」の学習の後、11月に児童生徒が「わたしのロードマップ」を作成することを通して、自分のキャリアについて考えた。具体的には、「したい仕事」とその先にある「なりたい自分」という項目を使って、遠い将来のことについて考え、「今の自分」と「したい仕事」をつなげるために「そのために今できること・がんばった方がよいこと」、「そのために中学校卒業後にした方がよいこと」という項目を使って、今の自分や比較的近い将来のことを考えた。

この学習では、児童生徒からこれまで聞き取ってきたことを生かし、児童生徒が書きやすい

と思われるところから記入していった。今回の実践では、「パイロット」や「映画監督」、「バスケットボールに関わる仕事」、「困っている人を助ける仕事」といった「したい仕事」をすぐに答えられた児童生徒が多かったので、結果として「したい仕事」から考えをふくらませ、別の項目を考えていくという流れが多くなった。

中学1年生の生徒Aは「したい仕事」から「今の自分」に落とし込んでいき、「そのために今できること・がんばった方がよいこと」に「教科の学習をがんばる」と書いた。また、小学校6年生の児童Aは、「したい仕事」に向けて「勉強をがんばらないといけないけど、今はスポーツに打ち込みたい」と言い、「そのために今できること・がんばった方がよいこと」には「スポーツをがんばる」と書き、その後の「そのために中学校卒業後にした方がよいこと」に「勉強をがんばる」と書いていた。中学校1年生の生徒Bは、教員とやりとりをしながら、自分の将来について現実的かつ客観的に考えて、自分の考えを書くことができた(表4)。また、児童生徒が書いた内容を関係職員と共有することで、児童生徒理解の一助とした。

表4 中学校1年生の生徒Bが書いた「わたしのロードマップ」の内容とその時のやりとり

書いた順番	項目	児童生徒が書いた内容	◇教員の声掛け ◆生徒が話した内容
1	したい仕事	映画監督	◇「映画監督になりたいと聞いたことがあったけど、それを書く？」 ◆「先生にまだ言ったことはなかったけど、映画監督になりたい。」
2	なりたい自分	俳優にアドバイスできる。	◇「どんな大人やどんな映画監督になりたい？」
3	そのために中学校卒業後にした方がよいこと	工業系の高校	◆「映画監督は機械に強い方がいいだろうから、工業系の高校がいい。」
4	そのために今できること・がんばった方がよいこと	数学をがんばる。いろいろな言葉を覚える。	◆「工業系の高校なら、数学をがんばった方がいいと思う。いろいろな言葉が使えと、監督になったときに便利かも。」
5	今の自分	だらしない。	◇「今はだらしないと思っているんだね。」

3 成果と課題

- オンラインアンケートフォームや生成AIなどのICTを活用したことで、多言語への対応を効率よく行うことができた。
- 実践を進める過程で、学校や職業、将来のこと、自分の思いを伝える表現に関する日本語の指導ができた。また、児童生徒の将来への考えを考慮した前向きな声掛けにつながった。
- 児童生徒が将来や今の自分について考えたことで、将来への見通しをもち、今の自分の課題を客観的に自覚したり、がんばった方がよいことや自分の進路、将来の自分について具体的に考えたりすることができた。
- 児童生徒が書いた「わたしのロードマップ」を関係教員で共有したことで、児童生徒が自分の将来について具体的に考えていることに教員側が気づき、児童生徒の考えを前向きに受け止め、応援していこうという雰囲気が醸成された。
- ロールモデル「みんなの足あと」については、ロールモデルの数と内容の焦点化に課題が見られた。ロールモデル自体は、数が多い方が児童生徒の知りたい情報が得られる可能性が高まる。一方で、数が多くなる分、児童生徒にとって内容を理解するための負担が増えることになる。そのため、ロールモデルの数を増やし、情報を多くすることと、児童生徒の実態や希望に合わせて教員が提示する資料を精選するなど、内容を焦点化することの両方が必要である。
- 入り込み指導中心の児童生徒に対して個別に支援をしながら学習する時間が取りづらくなってしまった。そのため、授業の合間の時間における支援や学級担任と協力して学習を進める等の工夫が必要である。
- 今回の実践は、児童生徒が将来への見通しをもつことを目的にしており、児童生徒と保護者が進路についての知識を得られるわけではない。そこで、本実践と並行して、進路に関する情報提供を行う必要がある。

4 資料

(1) 「みんなの足あと」

👣👣みんなの足あと👣👣

名前:ひみつ 年齢:ひみつ 職業:ひみつ

◇注意◇ 学習者だけが見ていいシートです◇

母国:

日本に来たきっかけ または 外国とのつながり:

母国 または つながりのある国についての思い:

小さい頃:

学生時代:

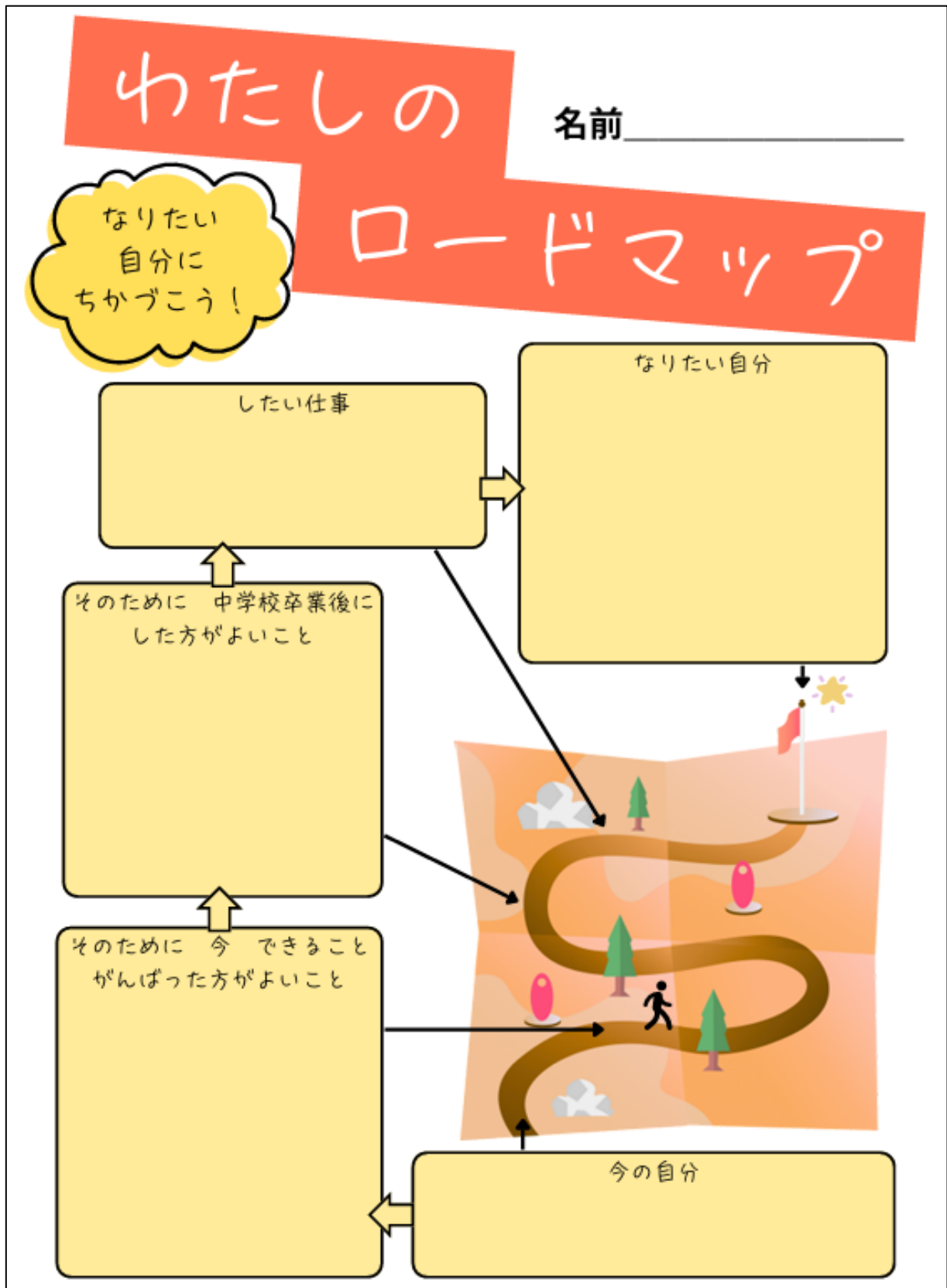
仕事について:

これからのこと:

◇学習者へのメッセージ◇

※使用言語:英語/English

(2) 「わたしのロードマップ」



実践事例 4

1 実践テーマ

多文化共生の心を育む指導の工夫

～児童生徒が自分らしく学び、互いを理解しながら成長できる教室づくり～

2 実践の概要

利根沼田地区の小中学校は全部で34校であり、令和7年度にJ S Vが巡回訪問したのは、12校である。そのうち、対象児童生徒が1人の学校が9校である。このように、外国人児童生徒等が各校に少数在籍している地域を散在地域という。散在地域の児童生徒は、学校内に外国人児童生徒等が自分だけ、又は少人数という環境で過ごしているという特徴がある。そのような児童生徒は、太田市や伊勢崎市のような、学校内に外国人児童生徒等が多く在籍している集住地域に比べて、学校生活に慣れるまでに時間を要したり、日本語指導で日本語を学んだとしても、間違いを恐れて日本語を話すことや書くことをためらったりする傾向がある。同じ学校内に自分と同じ境遇の友人がいると気持ちも楽になるが、自分だけ、又は少人数という環境では不安が大きくなると推察する。

そこで、大きな助けとして期待したいのが、周囲の児童生徒である。周囲の児童生徒の中には、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒もいるが、役に立ちたい、話したい、一緒に遊びたい、一緒に学びたい、という気持ちがあるものの、外国人児童生徒等と関わる経験が少なく、どのように接したらよいか戸惑う児童生徒もいる。そこで、外国人児童生徒等の思い、周囲の児童生徒の思いをつなぐよい方法は何かと考えた。児童生徒同士が自然に交流するのを待つだけでなく、J S Vや学級担任が、つなぎ役として「交流の機会を創出」したり、「発信や自己表現の場を設定」したりすることが必要である。この2つを柱に以下のような実践を行った。

(1) 交流の機会を創出

現在、多くの教科で、自分の考えを基に友人と意見を交わす交流活動が取り入れられている。交流活動を意識的に継続して取り入れることで、外国人児童生徒等が自然な文脈で使われる日本語を聞く機会が増える。この交流活動をよりよいものにするために、コミュニケーションポイントシート(図1)とコミュニケーションフレーズシート(次ページ図2)を作成した。

図1 コミュニケーションポイントシート

図1のコミュニケーションポイントシートについて説明する。語彙の少ない外国人児童生徒等とコミュニケーションを図るときにはポイントがある。それを「きくとき」と「はなすとき」に分けて提示した。外国人児童生徒等の話を聞くときは、日本語が不自然なことがあるので、話をじっくり聞き、うなずいたり、相手の言葉を繰り返して確認したりする必要がある。また、相手が話を続けやすいように、「私もそう思います」「素晴らしいですね」などと反応したり、

「どうしてですか」と質問したりすることが有効である。話すときには、簡単な日本語に言い換えて、ゆっくり話すことに加え、ジェスチャーや視覚資料を提示する非言語手段が有効である。さらに、「～がわかりますか」など、自分の話を理解したかどうかを確認することも大切である。周囲の児童生徒が英語や相手の母語を話すことも外国人児童生徒等の所属意識が高まるので推奨したい。

<small>ぶん み にほんご えいご い ゆび さ</small> コミュニケーションフレーズシート 文を見て 日本語か 英語を 言います。指で 指しても よいです。		
Please look at phrases and say them in Japanese or English. You can point them with your fingers.		
1	はなして ください。	Please tell me.
2	きいて ください。	Please listen.
3	わたしも、そう おもいます。	I think so.
4	わたしは、そう おもいません。	I don't think so.
5	いい かんがえ です。	Good ideas.
6	ほかに かんがえが あります。	I have other ideas.
7	あなたは、どのように おもいますか。	What do you think?
8	なぜですか。／どうしてですか。	Why?
9	りゆうが あります。	I have reasons.
10	しつもんが ありますか。	Do you have any questions?
11	～を していますか。	Do you know ~?
12	～が わかりますか。	Do you understand?
13	すこし	A little.
14	わかりません。	I don't understand.
15	わかりました。	I understand.
16	もういちど、おねがいします。	Pardon?
17	ゆっくり、はなしてください。	Could you speak more slowly?
18	よみかたを おしえてください。	Please tell me how to read this.

図2 コミュニケーションフレーズシート

図2のコミュニケーションフレーズシートについて説明する。図1で示したコミュニケーションを図るときのポイントを実践するために役立つ表現を18種類、提示したものである。1、2は話の始め方、3～6は反応するための表現、7～9は話を続けるための表現、10は質問の仕方、11～15は確認の仕方と答え方、16～18は外国人児童生徒等がお願いするための表現である。英語を併記することで、外国人児童生徒等が、意味を理解したり、周囲の児童生徒が英語を話したりできるようにした。

① A校の実践

学級担任が、ペア交流やグループ交流のポイントについて、学級全体に問い掛けた。あえて、外国にルーツをもつ児童に焦点を当てずに意見を吸い上げた。すると、周囲の児童は、「大きい声」「相手の目を見る」「丁寧な言葉で」などと返答した。学級担任が、それらの児童の発言を認めながら補足をし、コミュニケーションポイントシートを提示した。それと併せて、コミュニケーションフレーズシートを役立つ表現として紹介し、日本語と英語を組み合わせで話したり、必要な表現を指で指したりして対話を続けるように伝えた。

具体的な交流場面として、「三角形の面積の求め方を考えよう」（算数）、「米の利用について考えよう」（総合）、「日本のよいところを見つめよう」（道徳）などがあつた。算数の授業で、外国にルーツをもつ児童とペアになった児童が早口で説明する場面があつた。そこで、J S Vがコミュニケーションポイントシートの⑥を指差しながら、ゆっくり話すように助言した。ペアの児童がゆっくりと説明した後に、J S Vがコミュニケーションフレーズシートの12の表現を指差しながら確認するように伝えた。ペアになった児童が「わかりますか」と尋ねると、外国にルーツをもつ児童はうなずいていた。総合的な学習の時間では、グループで課題について話し合っていたので2枚のコミュニケーションシート(図1、図2)を渡した。すると、周囲の児童が漢字の読み方を繰り返し教えたり、稲の写真を見せて言葉を説明したりす

る様子が見られた。道徳の意見交流の時間には、外国にルーツをもつ児童から周囲の児童に近づくと周囲の児童も気付いて「やろう」と話しかけて対話が始まった。周囲の児童は、うなずきながら話を聞き「いいね」と反応していた。その様子を見守っていたJ S Vは、双方を「上手ですね」と褒めた。

2枚のコミュニケーションシートを使い始めたころは、J S Vや学級担任がそれらを見せると周囲の児童が、「あっ」と思い出したように実行することが多かった。しかし、2枚のコミュニケーションシートを交流のときに提示したり、教室に掲示したりすると、「聞き方」「話し方」が身に付き、上手に交流する児童が増えた。外国にルーツをもつ児童は、周囲の児童の反応があることで、自分の発した日本語が通じたことが分かって自信が付き、自分から周囲の児童に近づいたり、言葉を発したりすることが増えた。そのような場面が、授業中に限らず休み時間や掃除の時間にも広がっていった。外国にルーツをもつ児童と周囲の児童の双方がコミュニケーションの方法を身に付けるために2枚のコミュニケーションシートは有効であった。

(2) 発信や自己表現の場を設定

巡回校の多くは、帰りの会にショートスピーチを取り入れている。この取組を生かし、外国人児童生徒等の母国紹介の場にするると、多文化共生につながる考えた。取り出し指導の時間にスピーチ原稿を作り発表練習を行った。また、絵、写真、図、説明文を載せた壁新聞も作成して掲示した。

① B校の実践

B校では、ショートスピーチのお題が事前に提示され、日直が帰りの会で発表する。外国にルーツをもつ生徒は、内容の中に母国のことを盛り込むようにした。7月に「1日、自由にクラスで過ごすとしたら」というお題が提示された。「好きな音楽をかけて、みんなでローラースケートをしたいです。休憩時間には、スイーツを食べたいです」というショートスピーチを取り出し指導でJ S Vと対話しながら作成した。練習を十分にしてから、帰りの会で発表した。外国にルーツをもつ生徒は上手に発表ができ自信が付いた。周囲の生徒が、興味をもって聞き、好意的な反応をしたことで、クラス全体が温かい雰囲気になった。

② C校の実践

C校でも、帰りの会で日直がショートスピーチを発表する。ショートスピーチで母国を紹介することに加えて、壁新聞の作成も試みた。



図3 壁新聞

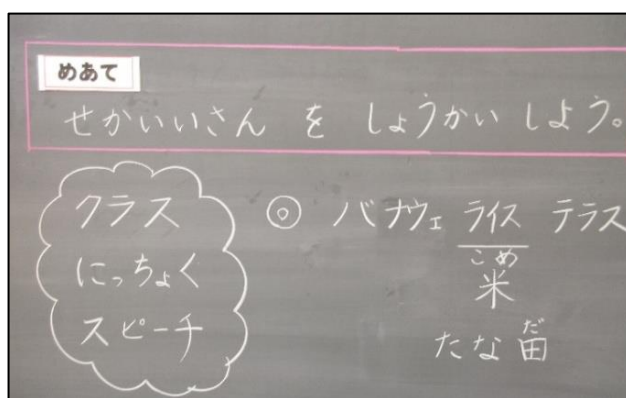


図4 取り出し指導の板書

図3は、1学期に行ったJ S Vの取り出し指導でフィリピンの基礎知識を紹介するために作った壁新聞の一部である。外国にルーツをもつ児童は絵が好きなので、「フィリピンから日本まで飛行機でどのくらい時間が掛かるか」「日本とフィリピンの人口」について、絵を取り入れることにした。また、クイズを入れると見る人が答えを調べたり、答えについて会話したりすると考えて取り入れた。他学年の児童も見られるように廊下に壁新聞を掲示すると、多くの児童が壁新聞の前で立ち止まり、フィリピンに興味を示していた。そのような周囲の児童の姿を見て、外国にルーツをもつ児童は嬉しそうだった。それ以降も取り出し指導で、母国の有名なスイーツ、世界遺産、昔話などについてショートスピーチと壁新聞を作成した。

図4は、フィリピンの世界遺産を紹介するためにショートスピーチと壁新聞を作成した取り出し指導の板書である。たくさんある世界遺産の中から外国にルーツをもつ児童とJ S Vで相談して、総合的な学習で調べている米作りに関係のある棚田について紹介することにした。外

国にルーツをもつ児童も実際に行ったことはない場所だったが、自分の国の美しい景色を紹介することに意欲を示していた。発表原稿を児童だけで書くことは難しいので、J S Vがキーワードを示したり、児童の質問に答えたりしながら5文の文章で表した。発表原稿は、漢字に振り仮名を振ったり、分ち書きにしたりして読みやすくした。壁新聞には、世界遺産のグッドポイントを箇条書きで簡潔に表した。

3 成果と課題

(1) 交流の機会を創出

- コミュニケーションポイントシート(図1)とコミュニケーションフレーズシート(図2)を作成し可視化することは、態度面の意識化につながり有効であった。
- 周囲の児童生徒の「聞き方」「話し方」が上手になったことで、外国人児童生徒等が安心して交流の場に居られるようになり、話しやすくなった。
- 日本人同士でも交流を深めることは難しいので、2枚のコミュニケーションシート(図1、図2)は交流の基本を確認することに役立った。
- コミュニケーションフレーズは、交流の始め方と続け方であり、意見を深めるには、豊富な語彙と思考力が必要となる。母語で思考することを踏まえて指導することも大切である。

(2) 発信や自己表現の場を設定

- ショートスピーチを実施している学校が多いので、既存の活動を生かして取り組みやすい。
- ショートスピーチや壁新聞を通して、世界の国々に興味を示す児童生徒が増え、多文化共生の心が芽生えた。
- 外国人児童生徒等が、母国について発信し、周囲に理解されることで所属意識をもつことができた。
- 取り出し指導をしていない児童生徒は、ショートスピーチや壁新聞を作成する時間を創出するのが難しい。

IV 研究のまとめ

J S Vによる日本語指導、担任等への助言及び指導体制への支援により、以下のような成果と課題があったと考える。

1 成果

- J S Vの取り出し指導や入り込み指導により、該当児童生徒の学校生活への適応や日本語習得を進めることができた。特に、日本語の指導記録や児童生徒が学習した様子を校内で共有することで、教職員間で指導内容について共通理解を図ることができた。
- 特別支援教育の視点を取り入れた日本語指導では、外国人児童生徒等が安心した環境で学べる授業支援について実践を行い、教職員に助言を行うことができた。
- キャリア教育では、教員や関係機関と連携し、児童生徒が将来の見通しをもち学校の活動や学習への意欲を高めることができた。

2 課題

- 外国人児童生徒等の教育について、担任及び日本語指導員だけでなく、教科担任や所属学年の教職員が関わりをもとうとするなど広がりを見せつつあるが、校内の指導体制を更に整え、全ての教員が一定水準の専門性を備えることができるように校内研修を年間計画に位置付ける必要がある。
- デジタル技術の積極的な活用や、外国人児童生徒等の母語の力を生かすことにより、校内における日本語指導を充実させることが求められる。
- 児童生徒の生活年齢や実態に応じた進路ガイダンス及び、外国人児童生徒等を含め多様な個性や特性を有する児童生徒の多様性を包摂する支援が必要である。

V 提言

日本語指導における情報の共有、特別支援教育やキャリア教育の視点を取り入れるなどして日本語指導への改善を図り、「点から面へ」の支援体制がより一層進むよう、校内の指導体制づくりを継続して行い、その成果を県内に広げていく必要がある。

<引用文献>

- 1) 群馬県総合教育センター(2021)
「外国人児童生徒等への学習支援ガイドブック ぐんまのかけはし」
- 2) 義務教育課人権・キャリア教育推進係(2023)
「ぐんまの外国につながる子供たちの学び応援サイト ハーモニー」群馬県教育委員会
<https://www.pref.gunma.jp/site/harmony/177682.html> (2025-11-06)

<担当指導主事>

望月 香織 柏木 純 千木良 昌計 住吉 里恵 木戸 健裕 新井 浩史

<実践事例>

実践事例 1	前橋市立城東小学校	近藤 智香子
実践事例 2	藤岡市立小野小学校	鈴木 威仁
実践事例 3	高崎市立八幡小学校	箱田 樹
実践事例 4	沼田市立升形小学校	角田 順子